

小・中学生の生き抜く力に関する研究  
— キャリアレジリエンス態度・能力尺度 (CRACS) の  
信頼性と妥当性の検討 —

坂柳 恒夫

学校教育講座 (進路指導)

**A Study on Career Resilience in Elementary and  
Junior High School Students  
— Examination of Reliability and Validity of Career Resilience  
Attitude-Competency Scales (CRACS) —**

Tsuneo SAKAYANAGI

*Department of School Education (Career Guidance), Aichi University of Education,  
Kariya 448-8542, Japan*

問題と目的

近年、社会経済的環境の急速なIT化やグローバル化、少子高齢化などの進展により、産業・職業構造が変化している。このような状況は、働く人たちの雇用環境だけでなく、これから働こうとする人たちの働き方・生き方などの心理面にも多大な影響を及ぼしていると推察される。また、失業者問題や若年者の無就業も大きな問題となっている。

学校教育においても、従来の教育の在り方を幅広く見直し、キャリア教育の推進が求められている。中央教育審議会は、2011(平成23)年に答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義づけた。この答申においては、初等中等教育だけでなく、初めて高等教育までも含めたキャリア教育について議論がなされ、育成する能力として、新たに「基礎的・汎用的能力」が提示された。社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力は、①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力、の4つから構成され、特に義務教育段階で重点的に育成することが要請されている(国立教育政策研究所、2011)。

さらに、中央教育審議会は、2013(平成25)年の「第2期教育振興基本計画について」の答申において、4つの基本的方向性に基づく方策の1つとして、「社会を生き抜く力」の養成を掲げた。「生き抜く力」では、これからの子どもたちには、想定外の事態に直面した際にも、自分を自分で守ることができる力が必要とされている。また、先行き不透明な時代

のなかを生きていく子どもたちには、たくましく「生き抜く力」が求められている。キャリア教育に関しては、第2期教育振興基本計画においても、「社会を生き抜く力」の1つの態様として、社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることとしている。

このように、キャリア教育は、当初の「勤労観・職業観を育てる教育」から「基礎的・汎用的能力を育てる教育」にシフトし、また「生きる力」から「生き抜く力」へと強調点が移行している（坂柳，2015）。

本研究では、キャリア教育における「生き抜く力」とは、「変化する社会のなかで、困難な状況にあっても、それを乗り越えて、自分なりのキャリアを創造していく力」と定義し、キャリアレジリエンス（career resilience）の用語を互換的に用いている（坂柳，2015）。

London (1983) は、キャリアレジリエンスとは、「変化する環境、それがひどく落胆させたり、破壊させたりするようなものであっても、適応する能力である」とし、キャリア・モチベーション（career motivation）の構成概念の1つとして位置づけている。しかし、キャリアレジリエンスの下位概念については言及していない。

Grotberg (2003) は、キャリアレジリエンスの構成因子として、「I HAVE 因子（資源の活用など）」、「I AM 因子（自律性、楽観性など）」、「I CAN 因子（問題解決、人間関係スキルなど）」の3つを挙げている。Grotberg (2003) によれば、レジリエンスとは、特別な能力や個人特性ではなく、誰もが保持し、伸ばしていくことができるものとされている。

レジリエンスの構成概念に関しては、研究者によって様々である。平野(2010)は、レジリエンスの先行研究を概観し、ソーシャルスキル、コンピテンス（問題解決能力、自己効力感・有能感など）、自己統制、チャレンジ（興味関心の多様性、努力志向性）、好ましい気質（抵抗力、忍耐力）、肯定的な未来志向（楽観性を含む）、その他（自己分析・自己理解など）に分類している。また、平野（2010）は、多様なレジリエンス要因を、持って生まれた気質と関連の強い「資質的レジリエンス要因（楽観性、統御力、社交性、行動力）」と、後天的に身につけていきやすい「獲得的レジリエンス要因（問題解決志向、自己理解、他者心理の理解）」に分類し、両者を測定する「二次元レジリエンス要因尺度（BRS）」を開発している。

最近では、キャリアレジリエンスに特化した尺度の開発もみられる。児玉（2015）は、キャリアレジリエンスを、「キャリア形成を脅かすリスクに直面した時、それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性」と定義し、「チャレンジ・問題解決・適応力」、「ソーシャルスキル」、「新奇・多様性」、「未来志向」、「援助志向」から構成される測定尺度を開発している。また、高橋・石津・森田（2015）は、「長期的展望」、「継続的対処」、「多面的生活」、「楽観的思考」、「現実受容」の5つの下位尺度から構成される「成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度」を開発している。

キャリア教育において、子どもたちの生き抜く力を育むためには、「基礎的・汎用的能力」（能力的側面）の育成だけでなく、「生き抜く態度」（態度的側面）の育成も併せて必要であると考えられる。以上の点も踏まえて、小・中学生の生き抜く力（キャリアレジリエンス）の程度・水準を、態度的側面と能力的側面の両面で測定するキャリアレジリエンス尺度の作成を試みた。本研究の主な目的は、作成された「キャリアレジリエンス態度・能

力尺度（Career Resilience Attitude-Competency Scales：略称CRACS）」について、その信頼性と妥当性を検討することである。

## 研究の方法

### 1. 調査の内容

調査の内容は、次のとおりである。

(1) キャリアレジリエンス態度尺度（Career Resilience Attitude Scales：略称CR-AS）  
キャリアレジリエンス態度尺度の構成にあたっては、坂柳（2015）の「生き抜く態度尺度（CRAS）」の改訂・短縮版として、次の4つの態度領域（下位尺度）が設定されている。また、坂柳・中道・栗田・早川（2015）は、大学生の生き抜く力（キャリアレジリエンス）を測定するため、CR-ASの信頼性と妥当性について検討している。

- ① 自己肯定：自己のよさを理解し、肯定的に認める。
- ② 援助関係：コミュニケーションを図り、援助的な人間関係を構築する。
- ③ 楽観思考：何事もポジティブに考え、前に踏み出そうとする。
- ④ 将来展望：将来に夢や希望を持っている。

キャリアレジリエンス態度の測定尺度の項目内容を、〈表1〉に示した。尺度は、各項目とも「5：よくあてはまる」、「4：ややあてはまる」、「3：どちらともいえない」、「2：あま

〈表1〉 キャリアレジリエンス態度尺度（CR-AS）の項目内容

---

#### 【自己肯定】

- 態度01：自分には、よいところがある。
- 態度05：自分のことを、とても大切に思う。
- 態度09：自分は、まわりの人に必要とされている。
- 態度13：自分に、自信がもてる。

#### 【援助関係】

- 態度02：困った時には、頼りになる人がいる。
- 態度06：自分のことをわかってくれる人がいる。
- 態度10：自分の考えや気持ちを素直に話せる人がいる。
- 態度14：他の人の思いを大切にしている。

#### 【楽観思考】

- 態度03：何でもチャンスだと思って、やってみようと思う。
- 態度07：できないことでも、とりあえずやってみようと思う。
- 態度11：失敗しても、また挑戦しようと思う。
- 態度15：困った時には、自分でやれることをやってみようと思う。

#### 【将来展望】

- 態度04：自分の将来に、希望をもっている。
  - 態度08：自分には、将来いろいろな可能性があると思う。
  - 態度12：将来の目標に向かって、努力している。
  - 態度16：自分の将来は、明るいと思う。
-

りあてはまらない」, 「1:まったくあてはまらない」という5段階評定法を用い, 5点から1点までの得点が与えられ, 各領域の合計得点が算出されるようになっている。したがって, 各下位尺度の得点範囲は, 4~20点に分布し, 中間点は12点となっている。この得点が高いほど, 当該領域の態度が高いことを意味している。

(2) キャリアレジリエンス能力 (Career Resilience Competency Scales : 略称CR-CS)

尺度の構成にあたっては, 社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力なども踏まえて, 次の4つの能力領域 (下位尺度) が設定されている。

- ① 自己発揮能力: 自己を理解し, 自己発揮ができる。
- ② 人間関係能力: コミュニケーションを図り, 豊かな人間関係が構築できる。
- ③ 問題対応能力: 問題を見つけたり, 解決方法などを考えることができる。
- ④ 将来設計能力: 将来に向けて, 夢や目標を描くことができる。

キャリアレジリエンス能力の測定尺度の項目内容を, <表2> に示した。

本尺度は, 態度尺度と同様, 各項目とも「5:よくあてはまる」~「1:まったくあてはまらない」という5段階評定法を用いている。したがって, 各下位尺度の得点範囲は, 4~20点に分布し, 中間点は12点となっている。この得点が高いほど, 当該領域の能力が高いことを意味している。

**<表2> キャリアレジリエンス能力尺度 (CR-CS) の項目内容**

---

**【自己発揮能力】**

- 能力01: 自分のことがわかり, 自分らしさを発揮できる。
- 能力05: うまくいかなくても, またやってみることができる。
- 能力09: 自分で始めたことは, 最後までやり抜くことができる。
- 能力13: つらいことがあっても, 自分なりに乗り越えていくことができる。

**【人間関係能力】**

- 能力02: あいさつや返事がしっかりとできる。
- 能力06: 相手の気持ちをよく考えて, 行動することができる。
- 能力10: まわりの人と親しくすることができる。
- 能力14: まわりの人と協力しながら, 活動することができる。

**【問題対応能力】**

- 能力03: 問題を見つけたら, 調べ方を考えることができる。
- 能力07: 結果だけでなく, なぜそうなったかを考えることができる。
- 能力11: 何かをするときには, やり方や順序を考えることができる。
- 能力15: 困ったときに, いろいろなやり方を試してみることができる。

**【将来設計能力】**

- 能力04: 将来の自分について, いろいろ考えることができる。
  - 能力08: 将来のことについて, いろいろ調べることができる。
  - 能力12: 将来, 自分が何をやりたいのかを見つけることができる。
  - 能力16: 夢や希望をかなえるためのみちすじがわかる。
-

## 2. 調査の対象・時期

調査は、中部地方の公立小学校2校、公立中学校2校において、小学生男子168名、小学生女子169名、中学生男子157名、中学生女子146名の総計640名を対象にして、2015（平成27）年6月～7月に実施された。調査対象者の内訳は、〈表3〉に示すとおりである。

〈表3〉 調査対象者の内訳

	小学生			中学生			計
	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生	
男子	56	50	62	52	51	54	325
女子	47	61	61	44	50	52	315
計	103	111	123	96	101	106	640

## 3. 分析方法

キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の分析にあたっては、次のことに基準をおいた。

(1) キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の信頼性

### ① 項目水準

CRACSの内的整合性（等質性）を項目水準で検討するために、各下位尺度内の4項目について、主成分分析を行う。また、各下位尺度内の4項目におけるそれぞれの項目と残り3項目の尺度得点の間の項目－全体（Item-Total）相関を求める。

### ② 尺度水準

次に、CRACSの内的整合性を尺度水準で検討するために、Cronbachの標準化された $\alpha$ 係数を算出する。

(2) キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の妥当性

### ① 下位尺度間の関連性

生き抜く力、すなわちキャリアレジリエンスの概念設定の適切さについて検討するため、CRACSの下位尺度間の相関係数を算出する。

### ② 基準関連妥当性

基準関連妥当性の1つとして、キャリアレジリエンス態度の下位尺度と、キャリアレジリエンス能力の下位尺度との関連性を検討する。

(3) 生き抜く態度の学校段階別・性別傾向

小・中学生の生き抜く力、すなわちキャリアレジリエンスの一般的傾向を把握するため、学校段階と性の2要因による分散分析を行う。

## 結果と考察

### 1. キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の信頼性の検討

(1) 項目水準での検討

最初に、キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の信頼性（内的整合性）につ

いて、項目水準で検討を行うことにする。〈表4〉は、CRACSの主成分分析結果、項目得点と下位尺度得点との相関係数 (I-T 相関) および各項目の平均得点と標準偏差を学校段階別に示したものである。

【キャリアレジリエンス態度尺度 (CR-AS)】

① 自己肯定尺度

自己肯定尺度4項目について、主成分分析を行ったところ、第1主成分の負荷量は、小

〈表4〉 キャリアレジリエンス態度・能力尺度 (CRACS) の主成分分析結果、I-T 相関および各項目の平均得点と標準偏差

下位尺度と 構成項目番号	小学生 (N=337)				中学生 (N=303)				
	主成分 負荷量	I-T 相関	平均 得点	標準 偏差	主成分 負荷量	I-T 相関	平均 得点	標準 偏差	
自己肯定	態度01	.778	.610	3.74	1.15	.842	.701	3.70	1.05
	態度05	.764	.590	4.17	.99	.766	.599	3.82	1.03
	態度09	.836	.687	3.43	1.17	.849	.713	3.19	.98
	態度13	.862	.724	3.75	1.20	.839	.696	3.26	1.15
援助関係	態度02	.783	.595	4.47	.90	.847	.709	4.31	.94
	態度06	.818	.639	4.22	1.06	.873	.749	4.03	1.07
	態度10	.791	.605	4.30	1.01	.864	.733	4.02	1.08
	態度14	.715	.515	4.20	.89	.699	.524	4.07	.89
楽観思考	態度03	.823	.671	4.09	1.00	.834	.696	3.75	.99
	態度07	.845	.702	4.26	.93	.837	.700	3.86	.95
	態度11	.843	.700	4.30	.89	.859	.731	3.85	1.02
	態度15	.762	.594	4.19	.93	.803	.653	4.01	.89
将来展望	態度04	.879	.771	4.20	1.09	.866	.747	3.83	1.08
	態度08	.846	.721	4.07	1.09	.869	.752	3.62	1.07
	態度12	.876	.765	4.09	1.15	.809	.665	3.87	1.05
	態度16	.809	.671	4.19	1.08	.832	.697	3.70	1.15
自己発揮能力	能力01	.744	.545	3.76	1.04	.686	.481	3.63	.96
	能力05	.739	.534	4.26	.87	.839	.668	3.89	.95
	能力09	.800	.610	4.03	.98	.754	.548	3.86	.97
	能力13	.805	.621	4.07	.99	.820	.643	3.96	.99
人間関係能力	能力02	.625	.406	4.20	.98	.789	.615	4.47	.78
	能力06	.718	.485	3.91	.91	.740	.555	4.00	.80
	能力10	.823	.617	4.23	.88	.809	.643	4.24	.93
	能力14	.829	.629	4.17	.95	.860	.718	4.12	.88
問題対応能力	能力03	.769	.574	3.74	1.05	.757	.559	3.32	.93
	能力07	.814	.633	3.77	1.06	.762	.565	3.64	.97
	能力11	.760	.563	3.88	1.01	.781	.584	3.69	.97
	能力15	.754	.555	3.94	1.00	.789	.597	3.69	.89
将来設計能力	能力04	.844	.711	4.07	1.09	.859	.733	3.80	1.03
	能力08	.872	.754	3.93	1.15	.837	.700	3.67	1.00
	能力12	.848	.718	4.19	1.07	.859	.733	3.86	1.06
	能力16	.791	.642	3.90	1.06	.782	.627	3.54	.97

(注) 相関係数は、すべて  $p < .001$  で有意である。

学生では.764～.862と、中学生では.766～.849となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。また、項目－全体相関をみると、小学生では.590～.724と、中学生では.599～.713となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。自己肯定尺度の各項目の平均得点は、小学生では3.43～4.17と、中学生では3.19～3.82となっており、相対的には小学生の得点が高くなっている。

以上のことから、項目水準でみた場合、自己肯定尺度の内的整合性（等質性）は高いと判断できる。

#### ② 援助関係尺度

援助関係尺度4項目に関する主成分分析の結果、第1主成分の負荷量は、小学生では.715～.818と、中学生では.699～.873となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が確認された。また、項目－全体相関をみると、小学生では.515～.639と、中学生では.524～.749となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。援助関係尺度の各項目の平均得点は、小学生では4.20～4.47と、中学生では4.02～4.31となっており、相対的に小学生の得点がより高くなっている。

以上の結果から、項目水準でみた場合には、援助関係尺度の内的整合性（等質性）は高いものと判断できる。

#### ③ 楽観思考尺度

楽観思考尺度4項目について、主成分分析を行ったところ、第1主成分の負荷量は、小学生では.762～.845、中学生では.653～.731となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。また、項目－全体相関をみると、小学生では.594～.702と、中学生では.653～.731となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。楽観思考の各項目の平均得点は、小学生では4.09～4.30と、中学生では3.75～4.01となっており、相対的には小学生の得点が高くなっている。

以上のことから、項目水準でみた場合、楽観思考尺度の内的整合性（等質性）は高いものであると判断できる。

#### ④ 将来展望尺度

将来展望尺度4項目に関する主成分分析の結果、第1主成分の負荷量は、小学生では.809～.879と、中学生では.809～.869となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。また、項目－全体相関をみると、小学生では.671～.771と、中学生では.665～.752となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。将来展望尺度の各項目の平均得点は、小学生では4.07～4.20と、中学生では3.62～3.87となっており、相対的に小学生の得点が高くなっている。

以上の結果より、項目水準でみた場合には、将来展望尺度の内的整合性（等質性）は高いと判断される。

### 【キャリアレジリエンス能力尺度（CR-CS）】

#### ① 自己発揮能力尺度

自己発揮能力尺度（4項目）について、主成分分析を行ったところ、第1主成分の負荷量は、小学生では.739～.805と、中学生では.686～.839となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。また、項目－全体相関をみると、小学生では.534

～.621と、中学生では.481～.668となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。自己発揮能力尺度の各項目の平均得点は、小学生では3.76～4.26と、中学生では3.63～3.96となっており、相対的には小学生の得点が高くなっている。

以上のことから、項目水準でみた場合、自己発揮能力尺度の内的整合性（等質性）は高いと判断される。

#### ② 人間関係能力尺度

人間関係能力尺度4項目に関する主成分分析の結果、第1主成分の負荷量は、小学生では.625～.829と、中学生では.740～.860となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が確認された。また、項目－全体相関をみると、小学生では.406～.629と、中学生では.555～.718となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。人間関係能力尺度の各項目の平均得点は、小学生では3.91～4.23と、中学生では4.00～4.47となっている。

以上の結果から、項目水準でみた場合には、人間関係能力尺度の内的整合性（等質性）は高いものと判断できる。

#### ③ 問題対応能力尺度

問題対応能力尺度4項目について、主成分分析を行ったところ、第1主成分の負荷量は、小学生では.754～.814と、中学生では.757～.789となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。また、項目－全体相関をみると、小学生では.555～.633と、中学生では.559～.597となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。問題対応能力尺度の各項目の平均得点は、小学生では3.74～3.94と、中学生では3.32～3.69となっており、相対的には小学生の得点が高くなっている。

以上のことから、項目水準でみた場合、問題対応能力尺度の内的整合性（等質性）は高いものであると判断できる。

#### ④ 将来設計能力尺度

将来設計能力尺度（4項目）に関する主成分分析の結果、第1主成分の負荷量は、小学生では.791～.872と、中学生では.782～.859となっており、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。また、項目－全体相関をみると、小学生では.642～.754と、中学生では.627～.733となっており、すべて正の有意に高い相関係数が得られた。将来設計能力尺度の各項目の平均得点は、小学生では3.90～4.19と、中学生では3.54～3.86となっており、相対的に小学生の得点が高くなっている。

以上の結果より、項目水準でみた場合、将来設計能力尺度の内的整合性（等質性）は高いと判断できる。

#### (2) 尺度水準での検討

次に、キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の信頼性（内的整合性）を尺度水準で検討するために、Cronbachの標準化された $\alpha$ 係数を求めた。結果を、〈表5〉に示す。

CRACSを構成する態度尺度（4つの下位尺度）および能力尺度（4つの下位尺度）の標準化された $\alpha$ 係数は、小・中学生ともに、.740以上であり、各尺度が4項目と少ない割には十分に満足できる水準にあった。



〈表5〉 キャリアレジリエンス態度・能力尺度の信頼性（Cronbachの $\alpha$ 係数）

	小学生（N=337）	中学生（N=303）
キャリアレジリエンス態度（総合）	.924	.932
①自己肯定	.826	.841
②援助関係	.781	.841
③楽観思考	.835	.853
④将来展望	.875	.865
キャリアレジリエンス能力（総合）	.916	.904
①自己発揮能力	.774	.779
②人間関係能力	.741	.812
③問題対応能力	.777	.774
④将来設計能力	.860	.855

（注）数値は、標準化された $\alpha$ 係数

また、キャリアレジリエンス態度の総合尺度（16項目）では、小学生.924、中学生.932、キャリアレジリエンス能力の総合尺度（16項目）では、小学生.916、中学生.904と、小・中学生ともに、.900以上であり、非常に高い信頼性係数が得られた。

以上の結果より、CRACSを構成している下位尺度は、内的整合性の観点より、一貫した内容を備えており、信頼性の高い尺度であるといえる。

## 2. キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の妥当性の検討

### （1）CR-ASの下位尺度間の関係構造

構成概念妥当性の一端を確認するため、CR-ASの下位尺度間の相関係数を、学校段階別に算出した。結果は、〈表6〉に示したとおりである。

〈表6〉から明らかのように、すべての組合せにおいて有意な中程度のプラスの相関が認められる。小学生では.578～.690、中学生では.580～.699となっている。このように、CR-ASの下位尺度間の結びつきは、全体的には強いといえる。とりわけ、「自己肯定」と「将来展望」との間には、かなり強い結びつきが認められる。

〈表6〉 キャリアレジリエンス態度尺度（CR-AS）の下位尺度間の相関係数

		平均	SD	①	②	③
小学生	①自己肯定	15.09	3.66			
	②援助関係	17.19	3.01	.610		
	③楽観思考	16.83	3.07	.586	.601	
	④将来展望	16.55	3.75	.690	.578	.580
中学生	①自己肯定	13.96	3.47			
	②援助関係	16.43	3.29	.653		
	③楽観思考	15.47	3.20	.591	.580	
	④将来展望	15.02	3.67	.699	.601	.630

（注）相関係数は、すべて $p<.001$ で有意である。

## (2) CR-CSの下位尺度間の関係構造

CRACSの構成概念妥当性の一端を確認するため、CR-CSの下位尺度間の相関係数を、学校段階別に算出した。結果は、〈表7〉に示したとおりである。

〈表7〉 キャリアレジリエンス能力尺度 (CR-CS) の下位尺度間の相関係数

		平均	SD	①	②	③
小学生	①自己発揮能力	16.12	3.00			
	②人間関係能力	16.51	2.78	.698		
	③問題対応能力	15.33	3.19	.709	.664	
	④将来設計能力	16.09	3.67	.506	.564	.598
中学生	①自己発揮能力	15.34	3.00			
	②人間関係能力	16.82	2.71	.659		
	③問題対応能力	14.33	2.90	.678	.521	
	④将来設計能力	14.86	3.39	.484	.428	.436

(注) 相関係数は、すべて $p<.001$ で有意である。

〈表7〉から明らかなように、すべての組合せにおいて有意な中程度のプラスの相関が認められる。小学生では.506~.709、中学生では.428~.678となっている。このように、CR-CSの下位尺度間の結びつきは、全体的には強いといえる。とりわけ、「自己発揮能力」と「問題対応能力」との間には、かなり強い結びつきが認められる。また、学校段階別でみると、小学生の下位尺度間の相互相関は、中学生のそれよりも、強い傾向がみられる。

以上のことから、CR-CSの構成概念は、妥当性を有すると判断される。

## (3) キャリアレジリエンスにおける態度と能力との関連

基準関連妥当性の1つとして、キャリアレジリエンスにおける態度と能力との関連性を検討する。

〈表8〉は、キャリアレジリエンスにおける態度と能力との相関係数を、学校段階別に示したものである。

〈表8〉 キャリアレジリエンスにおける態度と能力との関連

		自己肯定	援助関係	楽観思考	将来展望	態度総合
小学生	自己発揮能力	.664	.585	.702	.566	.746
	人間関係能力	.651	.602	.596	.588	.725
	問題対応能力	.580	.524	.636	.523	.671
	将来設計能力	.554	.423	.489	.765	.675
	能力総合	.716	.620	.707	.728	.826
中学生	自己発揮能力	.572	.561	.783	.600	.738
	人間関係能力	.606	.638	.579	.535	.693
	問題対応能力	.473	.416	.618	.491	.587
	将来設計能力	.369	.374	.461	.683	.561
	能力総合	.619	.610	.753	.724	.797

(注) 相関係数は、 $p<.001$ ですべて有意である。

全体的傾向として、キャリアレジリエンス態度とキャリアレジリエンス能力との間には、正の相関が認められる。すなわち、キャリアレジリエンス態度が高いほど、キャリアレジリエンス能力も高い傾向が示されている。とりわけ、「将来展望」と「将来設計能力」、「楽観思考」と「自己発揮能力」との関連がより強くなっている。

### 3. キャリアレジリエンス態度・能力の学校段階別・性別傾向

小・中学生のキャリアレジリエンス（生き抜く力）の質的な差異を把握する目的で、キャリアレジリエンスの各下位尺度と総合尺度について、学校段階別・性別による傾向を分析していくことにする。〈表9〉は、キャリアレジリエンスの下位尺度と総合尺度の学校段階別・性別の平均得点、標準偏差および分散分析の結果を示したものである。

各尺度ごとに、学校段階・性の2要因の分散分析を行った結果、交互作用はいずれも有意ではなかった。

#### ① 学校段階および性に関する主効果

キャリアレジリエンス態度尺度の「援助関係」に関してのみ、有意であった。

〈表9〉 キャリアレジリエンス態度・能力尺度の学校段階別・性別の平均得点、標準偏差（SD）および分散分析結果

	小学生		中学生		分散分析（F値）		
	男子 (N=168)	女子 (N=169)	男子 (N=157)	女子 (N=146)	主効果		交互作用
					学校段階	性	
CR-AS							
自己肯定	15.11 ( 3.81)	15.08 ( 3.53)	14.08 ( 3.56)	13.84 ( 3.39)	15.98 ***	.24 ns	.15 ns
援助関係	16.61 ( 3.35)	17.76 ( 2.50)	15.81 ( 3.46)	17.10 ( 2.97)	9.05 **	24.82 ***	.00 ns
楽観思考	16.82 ( 3.12)	16.83 ( 3.03)	15.48 ( 3.07)	15.46 ( 3.35)	29.79 ***	.00 ns	.19 ns
将来展望	16.44 ( 4.01)	16.65 ( 3.49)	14.85 ( 3.86)	15.19 ( 3.46)	26.78 ***	.87 ns	.12 ns
態度総合	64.98 (12.18)	66.33 (10.47)	60.23 (11.87)	61.58 (11.25)	27.37 ***	2.21 ns	.00 ns
CR-CS							
自己発揮能力	16.16 ( 2.99)	16.08 ( 3.01)	15.41 ( 3.56)	15.27 ( 3.04)	10.88 ***	.21 ns	.02 ns
人間関係能力	16.15 ( 2.95)	16.86 ( 2.57)	16.61 ( 2.76)	17.05 ( 2.65)	2.19 ns	7.14 **	.36 ns
問題対応能力	15.30 ( 3.30)	15.36 ( 3.08)	14.50 ( 3.59)	14.16 ( 2.83)	17.13 ***	.35 ns	.65 ns
将来設計能力	16.24 ( 3.51)	15.94 ( 3.84)	14.50 ( 2.97)	15.24 ( 3.71)	18.90 ***	.62 ns	3.40 ns
能力総合	63.86 (10.79)	64.24 (10.70)	61.01 ( 9.82)	61.72 ( 9.51)	10.93 ***	.45 ns	.04 ns

(注) \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001, ns有意差なし

「援助関係」は、学校段階では中学生よりも小学生の方が、性別では男子よりも女子の方が、援助関係の水準が高い。

② 学校段階のみに関する主効果

学校段階のみに関する主効果は、CR-ASでは「自己肯定」・「楽観思考」・「将来展望」の3つの下位尺度で、CR-CSでは「自己発揮能力」・「問題対応能力」・「将来設計能力」の3つの下位尺度で有意であった。いずれの尺度も、中学生よりも小学生の方が、当該態度・能力の水準が高い。

③ 性のみに関する主効果

性のみに関する主効果は、CR-CSの「人間関係能力」尺度で有意であった。すなわち、小・中学生ともに、男子よりも女子の方が、人間関係に関する能力の水準が高い。

単一の総合尺度とした「キャリアレジリエンス態度」・「キャリアレジリエンス能力」は、学校段階の主効果のみが有意であった。すなわち、小学生の方が中学生よりも、態度・能力の水準がより高い傾向が認められる。

キャリアレジリエンスを構成する下位尺度および総合尺度の平均得点は、「人間関係能力尺度」を除けば、全体的に小学生の方が中学生より高くなっている。しかし、中学生の平均得点は、下位尺度の中間点である12を上回っており、ネガティブに変化したというよりも、ポジティブな水準が小学生より低下していると解釈される（坂柳，2015）。

## 要約と今後の課題

キャリアレジリエンス、すなわち生き抜く力の程度・水準を、態度的側面と能力的側面の両面で測定するキャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）が作成された。

本研究でのキャリアレジリエンスの測定尺度は、主に個人の態度と能力に関するものに着目しており、Grotberg（2003）のI AM因子が態度尺度の「自己肯定」、「楽観思考」、「将来展望」、I HAVE因子が「援助関係」、I CAN因子が能力尺度の「自己発揮能力」、「人間関係能力」、「問題対応能力」、「将来設計能力」にほぼ該当するものと考えられる。

本研究では、小・中学生を対象にして、CRACSに関する信頼性および妥当性の検討を行った。その結果は、次のように要約できる。

① キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の信頼性（内的整合性）を、項目水準および尺度水準で検討した結果、キャリアレジリエンス態度・能力を構成する各下位尺度は、内的整合性の点で一貫した内容を備えており、信頼性の高い尺度あることが確認された。

② キャリアレジリエンス態度・能力の概念設定の適切性を検討するために、CRACSの下位尺度間の相関係数を算出した結果、すべての組合せにおいて有意な正の相関が認められ、CRACSの下位尺度間の結びつきは、全体的には強いものであった。この結果より、CRACSは概念的妥当性を有していると判断された。

③ 基準関連妥当性として、キャリアレジリエンス態度とキャリアレジリエンス能力との関連を検討した結果、全体的傾向として、キャリアレジリエンス態度が高いほど、キャリアレジリエンス能力も高いことが確認された。とりわけ、「将来展望」と「将来設計能力」、

「楽観思考」と「自己発揮能力」との関連がより強くなった。

④ キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）の下位尺度と総合尺度について、学校段階・性による2要因分散分析の結果、キャリアレジリエンスを構成する下位尺度および総合尺度の平均得点は、「人間関係能力尺度」を除けば、全体的に小学生の方が中学生より高くなっている。

以上の検討結果を総合して考えると、生き抜く力の態度と能力の両面を測定・評価することを目的として作成された「キャリアレジリエンス態度・能力尺度（CRACS）」は、おおむね、信頼性および妥当性のある尺度であることが保証されたといえる。

生き抜く力を育むキャリア教育においては、自己のよさに気づき、よりよい人間関係を築きながら、困難な状況を乗り越えて、夢と希望のある将来を創造していこうとするキャリアレジリエンスの育成は重要であると考えられる。今後は、キャリアレジリエンスとキャリア不安などとの関連について検討を加えていく予定である。

## 引用・参考文献

- 中央教育審議会 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について  
中央教育審議会 2013 第2期教育振興計画について  
Grotberg, E.H. (Ed.) 2003 Resilience for today: Gaining strength from adversity Westport CT: Praeger Publishers  
平野真理 2010 レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成 パーソナリティ研究19（2）, 94-106.  
児玉真樹子 2015 キャリアレジリエンスの構成概念と測定尺度の開発 心理学研究86, 150-159.  
国立教育政策研究所 2011 キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書  
London, M. 1983 Toward a Theory of Career Motivation The Academy of Management Review 8, No. 4, 620-630.  
坂柳恒夫 2013 キャリア理論 スクールカウンセリング推進協議会（編）ガイダンスカウンセラー実践事例集 学事出版, 92-95.  
坂柳恒夫 2015 小・中学生の生き抜く態度に関する研究—生き抜く態度尺度（CRAS）の信頼性と妥当性の検討— 愛知教育大学研究報告（教育科学編）64, 55-66.  
坂柳恒夫・中道明弘・栗田裕二・早川美子 2015 大学生の生き抜く力に関する研究—キャリア・レジリエンス尺度の作成とその分析— 日本産業カウンセリング学会第20回大会・発表論文集32-33.  
高橋美保・石津和子・森田慎一郎 2015 成人版ライフ・キャリアレジリエンス尺度の作成 臨床心理学第15巻第4号, 507-516.

(2015年9月24日受理)